

# 渡辺だいすけ 奔走記

第19号

2025年2月  
— 発行者 —  
福井県議会議員  
渡辺大輔

福井市新田塚1-70-31  
TEL.0776-50-2083



県政報告

## 不登校を考える！

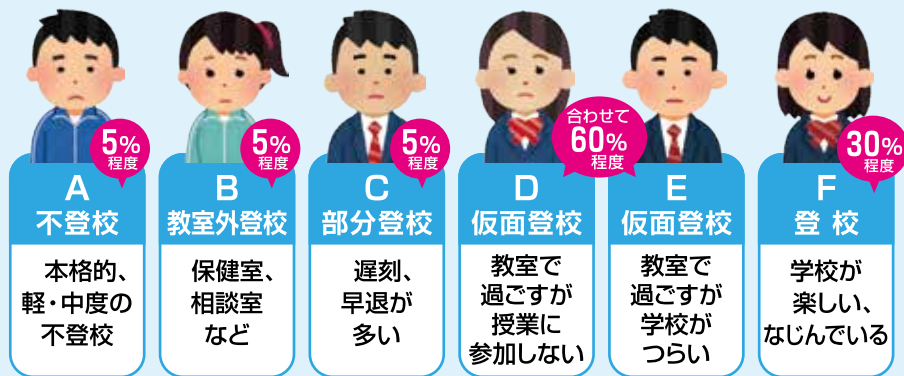
### なぜ不登校が増え続ける？ 居場所はないのか？

私は長年、教員として学校に勤務してきました。学校には様々な課題が山積していましたが、中でも「不登校」は、いろいろと手を尽くしても答えが見つからない課題でした。議員となった今でも答え探しをしています。そんな中で少しずつ見えてきたこともあります。一旦不登校になると、子どもはもちろん、保護者や家族もとても辛い思いをします。従って、この課題については、あきらめず、粘り強く取り組んでいこうと思います。今回はこの「不登校」について考えたいと思います！

#### ① 不登校が増え続けるわけ

子どもの数が減少し続ける中で、なぜ不登校児童生徒は増え続けるのか。令和5年度の不登校（病気や経済的な理由を除き年間30日以上学校を欠席した児童生徒）の割合は、小学校で約60人に1人、中学校で約15人に1人、高校では約50人に1人以上です。「学校生活をめぐる子どもの特徴6群」（日本財団 2018）では、不登校に関わる子ども達を次の6群に区別しています。

明治大学教授で教育学博士、かつスクールカウンセラーとして約40年間、不登校の子ども達に関わり、その研究の成果をまとめた諸富祥彦氏の著書「学校に行けない『からだ』」（図書文庫）の中で、著者はこの6群を使い次のように述べています。



「私のカウンセラー経験による実感では、AとBとCがそれぞれ5%程度。Fが約3割。大多数はDかEで、合わせて全体の6割程度を占めているのだと思う。（中略）なぜ不登校は増加しているのか。不登校の子どもがごく少数だった頃は、少数ゆえに本人にかかるプレッシャーが大きかった。不登校が一般化し広がった現在は、不登校になることによって本人

が被るダメージが小さくなった。学校を休むことへの抵抗が減ったことが軽度の不登校の増加につながり、反対にボロボロになってしまうまで無理して、重たい心のダメージを追うような不登校は減ったというのが私の見解。(中略) 学校で心から楽しむことができない多くの子にとって、基本的に学校はお付き合い場であり、自分らしくいられない場である。**隠れ不登校の子と、不登校の子の心のあり様に本質な違いはない。違うのはイヤなこととの付き合い方がうまいかへたかだけ]**

もちろん不登校が増え続ける理由はこれだけではないと思います。また、いじめなど友達関係、学習内容が分からない、発達障がい、など不登校になる理由が明確なケースもあります。ただ、諸富氏の説には私も経験上、共感できることが多々あります。学校では元気で明るくするのが当たり前、友達と仲良くするのが当たり前、先生の言いつけは絶対、やりたくない活動もしなければならぬ、など**本来の自分を内側に押し込めて、まるで仮面をつけているかのように当たり前を装う。**DやEの子ども達の中には、自分を装い続け、気づかないうちに頭痛、腹痛、朝起きれない、体が重いなどの身体の変調が起きる。**「不可避的に学校へ行けなくなることで、子どもが子ども自身を守っている。」**(諸富氏)

大人の社会では当然のことなのでしょう。ただ身体的にも発達段階で、精神的にも未分化、未発達で言語化することができない子ども達にとっては得体の知れない、恐怖すら感じる身体的な変調なのでしょう。



## ② 居場所について考える

まだ軽いうちは良いのですが、深刻な「身体の変調」を引きずったまま無理に行かせることは逆効果となります。学校や教室が本来の自分としていられる場所、つまり「居場所」となっているなら子ども達は自然に登校という選択をすることでしょう。ただ、どこにも「居場所」がなく耐えられない状況であれば、**本来の自分を取り戻すことのできる、学校(教室)でも家庭でもないいわゆる「第3の居場所」の提供も、時には必要だと感じます。**

福井県が今年度、県内50校に設置した「校内サポートルーム」も不登校児童生徒にとっては「第3の居場所」となり得ます。実際に完全に不登校だった、あるいは登校を渋っていた児童生徒が登校できるようになったとの事例も多いと聞きます。



▲ 校内サポートルーム

また、学校から離れた居場所としては、**教育支援センター(適応教室)やフリースクール**等があります。さらにオンライン授業や通学が選べる**通信制高等学校**なども近年では不登校生徒の受け皿となっています。

本来の自分を取り戻せる、安心して学べる「居場所」の設置、拡充に向けて、私もしっかり取り組んでいきます!



# どうなる？アリーナ構想！

福井市東公園を建設候補地とするアリーナ構想は、2027年秋頃に予定されていた開業が、資材高騰のほか、地元住民から要望されている防音対策などにより計画の見直しが必要となったことで、**最長1年程度遅れる見通しとなりました。**当初予定されていた整備費105億円（国25億円、県15億円、福井市10億円、民間等で55億円）は今後、上振れするのか、県の財政負担はどうなるのか、しっかりと県民の



▲アリーナの外観イメージ図

声を届けていきます。またこのアリーナは、現在プロバスケットBリーグ2部で活躍中の「福井スローウインズ」の本拠地とする構想です。同チームは2029年～30年中に、トップカテゴリー「Bリーグプレミア」参入を目指しており、そうなれば参入条件の1つである新アリーナは**2028年秋頃の開業が必要となってくることから、今後の動向が注視されるところです。**

一方で新アリーナは、県民利用として年間160日が想定され、その賃貸料として県が毎年2億円、福井市が7,000万円を支出する計画が上がっていますが、具体的にどのような事に160日も利用するのか、日数の根拠が示されていません。

福井県が県民利用の参考としている青森県八戸市のアリーナ「フラット八戸」で、開業にかかわった市の職員から直接話を聞くことができました。八戸市はもともとアイススケートが市民文化として根付いているいわば「アイススケートの街」です。ただ平成2年に市民に活用されていた民間のアイスアリーナが廃業したことで、新たなアイスアリーナ設立の要望が上がっていました。そこで「官民連携」の方式で、建設・運営は民間主体で、市（行政）は土地の無償貸し付け、建設費計はあらゆる無駄を省き35億円とし、そのうち2億円を市が負担、市民利用として年間2,500時間分の1億1千万円を賃貸料として支出、などの計画の



▲八戸市のアイスアリーナ「フラット八戸」

もと、令和3年に新アイスアリーナ「フラット八戸」を開業しました。この中で、市が借り上げる市民利用分2,500時間については、**旧アイスアリーナでの年間使用時間が2,500時間（約130日分）だったとの事で、根拠は明確であり、その証拠に市民利用枠の稼働率は99%です。**

福井県が県民利用として借り上げる160日の根拠とは、また福井市に建設されるアリーナが県民全体益につながるのか、議会において質していきます！



# フリートーク



県議会議事堂の3Fには、政治課題に関する新刊本のコーナーがあります。昨年末、私はそのコーナーをふと見ると、なんとショッキングなタイトルの本を目にしました。『ルポ 学校がつまらない 公立小学校の崩壊』(小林美希著 岩波新書)。思わず手に取りました。今の公立小学校(主に都会)の現状について詳細な調査のもとに書かれた内容でした。

「約半数の児童が中学校受験をするという都内のある公立小学校。(中略)塾で難問ばかり解いている児童にとって、学校の授業は退屈で仕方ない様子。すると授業中、タブレットを開いて周囲にわかるような大きな音量で堂々と

You Tubeを見ているのだ。担任が注意すると『うるせー!』と声を荒げ、『つまねー、何この授業ー。意味ねえー』。担任が『他の人の邪魔をして授業を受けたくないなら、廊下に出ていなさい』と言ってしまえば『は~あ~あ?』『今、行けて言われましたからー!』と言いがかりをつけ、廊下に飛び出しゲラゲラと笑いながらどこかに走って『脱走』してしまう。・・・」

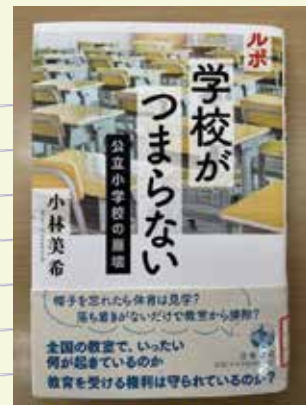
「小学校では6年生が最高学年として下級生のお手本となることが求められるが、受験組は『は?なんで運動会なんてやんなきゃなんないの?』運動会当日も見ることからやる気がない様子で、各学年の種目が終わるのを待ってられず『なーがーいーんでーすーけーどー!』とヤジを飛ばし、椅子に座って応援していることもままならず、歩きまわっていた。」(本文から)

極端な事例ではありますが、受験が過熱した都会に限らず公立小学校ではクラス内の学力差は大きく、また家庭の経済格差に加えて、外国に由来する子どもたち、障がいを持つ子どもなど、多様な子ども達が在籍します。そうした中、確かに担任の児童生徒への指示が通らずに、いわゆる「崩壊」した学級を私も見てきました。

一方で、こうした状況の中でも決して高圧的ではなく、日々の工夫された授業で子どもたちの学習意欲を喚起する先生方も数多く見てきました。例えば

- ◎薬を8時間おきに服用するのはなぜかといった課題を与え、子ども達同士で血中濃度の変化を調べながら考える。
  - ◎時差を学ぶ時には、世界でWEB会議をするには何時にしたらいいかを考える。
  - ◎原爆投下では、京都も候補地に挙がっていたながら、最終的に候補から外された理由を子ども達が考える。
  - ◎岩と島との違いを考え、一見「岩」のような海拔1m弱の2つの小島がわずかに残るだけの「沖の鳥島」から日本の領海を考える。
- ・・・などなど。基礎的な知識から教えるというより、興味や関心のある課題を探求しながら基礎的知識を身につける学習法です。

今、教員の長時間労働、担い手不足、さらには不登校など公教育の在り方が問われている時代です。子ども達が通いたいと思える、教職員がやりがいを感じる、そんな学校となるよう私も一議員としてあらゆる方策に取り組んでいきます!



お困り、  
お悩みなど  
ありましたら  
ぜひ  
ご相談を!

## 渡辺大輔事務所

〒910-0067 福井市新田塚 1-70-31

TEL.0776-50-2083 FAX.0776-50-2086

E-mail d-wat571@outlook.jp

<https://watanabe-daisuke.jp/>



Facebook用



オフィシャルサイト